

図 2 Ra 経年変化

基本的な粗さ指標である算術平均粗さは30代に向け大きく増加し、その後漸増する傾向を示しました。

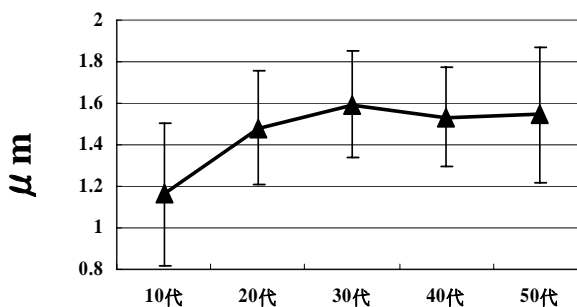


図 3 Rsm 経年変化

凹凸の平均間隔 (Rsm) は30代まで増加し、その後は飽和する傾向を示しました。

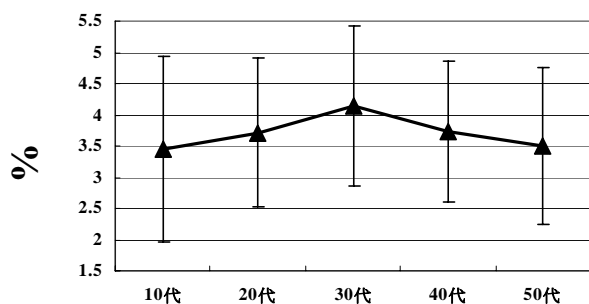


図 4 Rmr 経年変化

凹凸の形状の負荷長さ率 (Rmr) は30代をピークとする傾向を示しました。

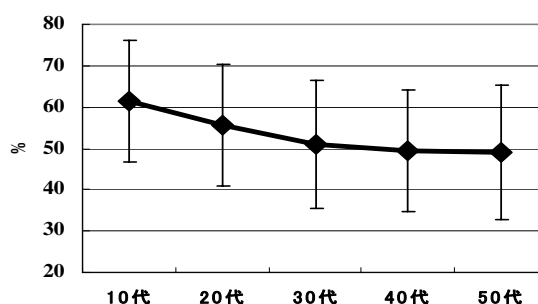
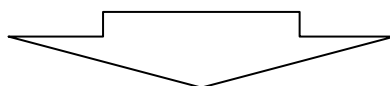


図 5 等方性年変化

表面形態の等方性は30代に向けて急激に減少していることが明らかとなりました。



Ra は30代に向け大きく増加しました。この増加は毛穴面積の増加によるものと考えられます。また Rsm も30代に向け大きく増加します。この Rsm が増加した場合の肌は、凹凸の間隔が長くなることを意味しており、肌表面の凹凸の高さから一定量だけ下がった断面の長さ (即ち Rmr) も増加すると考えられています。実際、Rsm の増加とともに Rmr も30代に向けて増加しています。一方で、30歳以降ではこの関係に変化がみられます。Rsm はほぼ一定値を取り、このような条件下では肌の凹凸の間隔は一定です。一方で Rmr は減少しています。この Rmr の変化は即ち、肌の凹凸の凸構造のボリュームが減衰したと考えることが出来ます。さらに30代に向けて急激に等方性が減少していることが明らかとなりました。等方性は、肌表面の形状の方向性がないと高く、方向性を持った波状のような構造があるとき減少します。これらの結果を総合的に考察すると、肌表面に山脈のような構造ができていると考えられます。